オーストラリア短編小説のテーマ

成 沢 紀 夫*

1. ま え が き

オーストラリア人は一見楽天的に見える．Donald Horne (1921～　)が *The Lucky Country* (1964)でいうように，"開襟シャツを着て子供達と海岸で黙ってアイスクリームを食べる"といったイメージがふさわしく見える．しかし彼らの短編小説を読むと，その心の中心をしめているものが生存競争あるいは適応であると言わざるを得ない．Beatrice Davis and Douglas Stewart 編 *Best Australian Short Stories* (1971) には，Henry Lawson (1867～1922) から Judith Wright (1915～　) まで52編の短編小説が収められているが，次のようなテーマを持つ作品が繰り返し登場する．

(1) 変人奇人を主人公にしたものが11編．これは奥地すなわちブッシュの孤独が産んだ風変わりな人物像を描く sketch of eccentrics[1] という小ジャンルを原点とする作品群である．

(2) 苛酷な自然条件に耐えるというテーマが3編．どれも日照り，火事，洪水，家畜の病気など奥地に適応しようとするブッシュマンの苦労の種が並べられる点が共通項として目に付くが，その背後にあるオーストラリア人の心情が問題である．

(3) 異民族間の摩擦のテーマが8編．中国人対アイルランド人，ユダヤ人対イギリス人などの摩擦．またアイルランド系やウクライナ出身のユダヤ系が，その強烈な民族性ゆえに同化に苦しむというテーマもある．

(4) 生存競争をテーマにしたもので，異民族間のものでないものが5編ある．

(5) メートシップをテーマにしたものが4編．生存のための知恵といわれるメートシップのテーマは，ローソンだけでなく現代の短編にも登場する．人の心を開く，すなわち，私はこうやって人の心を開きましたというテーマは Alan Marshall (1902～84) の生涯のテーマであるが，これが2編ある．

(6) 保身のテーマが意外に多く，4編．シドニーへ単身赴任のサラリーマンに恋人ができるが結局妻の許へ帰る話とか，若い人妻に魅せられつつも奨学金を得るための勉強に戻る思春期の少年を描いた名作 'Mathieson's Wife' にも副テーマとしてこれがある．

(7) 夢を抱くとでもいうテーマが5編．現実的な夢が多い．

これらのテーマの背後に共通に覗いているのはオーストラリア人の適応への関心である．

2. *Best Australian Short Stories* テーマ一覧表

まえがきで述べたテーマ別に Davis and Stewart 編 *Best Australian Short Stories* に採録された52編の短編小説を分類し，一覧表を作成した．(本論文末尾)

番号は原本には無いが，通し番号をつけた．主なテーマの外に副テーマが一つまたは二つ

* 一般科助教授
原稿受付　昭和61年9月30日

存在するものがあり，主テーマは◎で，副テーマは○で記入した．短編小説は手法的に一つの主テーマを持つものであり，主テーマ，副テーマの判定に苦しむ作品は少ない．適応・不適応の判定は○×で記入した．分類したテーマと関係なく作品の登場人物が環境に適応しているか否かを判定した．この判定が的外れの作品は6編のみであるが△で記入した．個々の短編小説の雑誌等への発表年は必ずしもはっきりしないものが多いので大体の時代区分を示した．時代区分は Leonie Kramer and Adrian Mitchell 編 *The Oxford Anthology of Australian Literature* (1985) に倣った．

3. 分類別作品論（抄）

分類に従って，個々の作品を紹介し，簡単な論評を加え，分類の正当化を試みたい．ただし，紙面の制限があり，全部の作品を取り上げることは出来ない．

3—1 変人奇人の肖像

この小ジャンルの創始者ともいえる Henry Lawson (1867～1922) の 'Bush Undertaker' をまず取りあげる．葬儀屋といえば，高価な棺桶を売り付けて商売繁盛というイメージが普通だが，この主人公は別に葬儀屋ではない．奥地で主人の羊を飼う独り住まいの老人である．犬一匹を友とし，時に独り言をいい，時に犬に友達のように話し掛ける．時は目がくらむように暑いクリスマスの日．彼は早めに羊を囲いに入れ，食事を済ますと，3マイル離れた山のふもとに行く．そこには原住民の埋葬した塚があり，老人は以前から気にかけていたのである．掘り出した人骨は白黒，男女ともわからないが，袋に入れて持ち帰る．その帰り道，木の根かたに熱でミイラ化した死体を見付ける．生前酒を飲みすぎ老人に注意を受けていたブラミーである．傍らのびんにはラム酒がまだ相当入っている．老人は，伐採者が置いていった木の皮に包んで，ブラミーの死体を小屋まで運んで来る．翌日，老人は死体を手厚く葬り，聖書の言葉を怪しげなアクセントで唱えてやるのである．ローソンはこの短編の結びでオーストラリアの奥地—ブッシュを，"風変わりな精神の持ち主の乳母であり家庭教師"だといっている．気が狂ってもおかしくない環境で，老人は拾ったラム酒をうまそうに飲み，ブラミーの死体に話し掛ける．薄気味悪く死体を追って付けて来るゴアナ，暑さ，そして孤独．ローソンの技巧は，その恐ろしさをさりげなく並べて来るところと，老人の心理に決して踏み込まず，あくまで行動の描写に止どまっている節度とにある．老人の名を呼ぶ者がいないため，その名は最後まで不明である．この作品の分類には異論は無いであろう．老人が風変わりではあるが健全な精神を保っているのは，犬を友とし，見知らぬ人骨を採取し，知人のブラミーを葬ってやるといった社会性・連帯性を彼が失わないためであろう．テーマ一覧表で副テーマをメートシップとしたのはそのためである．

Hugh McRae (1876～1958) の Adventure (珍事) もブッシュが産んだ奇人の話である．大伯父は80歳．銃を手にユーカリの樹下にじっとうずくまって，過去に生きる老人である．近隣まで住宅地が迫っているのだが，彼には広大なオーストラリアの空間しか見えない．彼は自分の犬が帰って来るのをじっと待っている．毎晩彼は皿に骨を乗せて待つ．大伯父はかつてブッシュで飢えに襲われ，自分の愛犬の尾を斧で切って食ってしまったのだ．それ以後彼が犬を呼ぼうと口笛を吹くと，犬の尾が彼の体中で振られるという．わずか2ページの超短編ながらブッシュの孤独，人と犬との連帯，飢えがその連帯を切り裂く悲劇とその後遺症

などが効果的に語られている.

Price Warung (1855～1911) の 'Lieutenant Darrell's Predicament' は流刑制度が産んだ奇人を扱っている. 時は流刑植民地時代, 場所は当時 Van Diemen's Land と呼ばれていたタスマニア島の Macquarie Harbour. 若い軍人ダレルが6人の部下を指揮し, 20人の囚人に作業をさせている時反乱に合い, 自己の残酷な仕打ちの復しゅうを受ける話である. 筆者ワラングは制度に責任があるという. 同じ階級の同年輩の少年がまだ在学中の19や20の若さで, 彼は最も堕落した人間の上に無制限の権力を振るえる位置に置かれた. そして有能な行政官と賞賛されるうちに残忍な性格を成長させ, cat-o'-nine-tails という罪人を打つ鞭に改良を加えたり, 特殊な猿ぐつわを工夫したり, 離れ小島に置き去りにしたりする刑罰を考え出したりするに至るのである. ワラングのこの種の作品に対する最大の不満は, 囚人の人間性に言及がなされていない事である. これなしでは, Marcus Clark (1846～81) の *His Natural Life* の感動は無く, 制度や人間の残酷さに対する興味本位の報告に終わってしまう. しかも, 昔の物語のプロットを借用して読者の興味をそそろうとしている点は. 著者の流刑制度批判という大義名分には逆効果である. sketch of eccentrics はブッシュの産んだ風変わりな人物を扱った報告風の短編をさすが, この作品は 'Wharf Labourers', 'The Duel' と共にこの分類ではやや毛色の変わったものである.

3—2 耐える

オーストラリアの自然に適応するため耐えるということは. オーストラリア文学の重要なテーマである.

Henry Lawson の 'A Drover's Wife では. 夫の留守を守る家畜追いの妻が, 家に入りこんでしまったヘビを. 犬や子供と一緒に徹夜で退治するというエピソードの中で, ブッシュ生活の様々な苦労が回想的に語られている. 苦労の第一は干ばつである. これは土地所有の牧羊業者 squatter だった夫を. 雇われて家畜の大群を市場へ追う drover へと転落させた. 次には bush fire, 家畜の病気, ニワトリを襲うカラスやワシ, 灌がい用のダムをこわす大水, 夕方現れて食物やたばこをねだる sundowner や swagman, 手抜き仕事をする原住民, そして孤独である. ローソンの作品はこういった労苦を列挙しながら, みじめを感じさせず, ぎりぎりの生活から美しさを絞り出し, そこはかとなく詩情を漂わせるといった捕らえがたい魅力がある. なんの変哲もない風景が画家のスケッチブックの上で美しく変貌するように, 苦労ばかりで娯楽の無いブッシュの生活が, ローソンの筆にかかるとユーモアや詩情を漂わすのである.

Edward Dyson (1865～1931) の 'A Visit to Scrubby Gully' は著者が僻地の鉱山を訪れ, 近くの農家に泊めて貰った時のスケッチである. 二晩泊まっている間に. この農家の苦しみ, 牛の病気, ウサギの害, 火事, 子供を迷子にして死なせたこと, 農耕馬の死などが明らかにされる. 著者はいう. "過重な労働でこの男の感覚はある限度以上の苦しみを受付けなくなってしまった. だから今の苦しみの上に, 熱病が来ようが, 火事や死が来ようが, この男は無感動と運命への従順とを保つのだ." この言葉にオーストラリア文学の無宗教性というものが凝集している. ちなみに, この短編集に選ばれた52編の中で宗教に触れているのは, Barbara Baynton (1857～1929) の 'The Chosen Vessel' ただ一つである.

Frank Dalby Davison (1893～1970) の 'The Road to Yesterday' は, 語り手が若い頃

ケント州出身のシムズ氏の農場で働いていたのを懐かしんでその農場を再訪し，思い出を語るという形式で書かれている．いわゆるセレクションという百エーカー位の小農場だが，木一本取り除くにも三日も四日もかかり，その後の処理も火で燃やしたり，残った根を掘り出すなどの苦労を経験．シムズ夫妻には，息子三人のほか年頃の娘も二人いて楽しい日々もあった．シムズ氏はリンゴ，クローバー，カブハボタン，キイチゴなどを試みるが失敗．ライ麦でやっと成功し，一家総出で刈り入れをする．シムズ氏は出身地ケントびいきでよくお国自慢をしたが，ではなぜケントを去ったのかと問われて，あそこでは小川のメダカ一匹も地主の持ち物なんだという．この問答には，シムズ氏のみならずオーストラリア人が英国に対し抱いて来た愛憎相反する気持ちが表現されており，またシムズ氏が苦労に耐える気持ちの根底にあるものを表現している．この短編は作者の体験にもとずく事実の重みがあり，読者を感動させずに置かない．

3—3 異民族間の摩擦

Edward Dyson の 'A Golden Shanty' はゴールドフィールドを題材とする短編中の古典であり，また往時の反中国人感情を反映した作品である．場所はメルボルン西北西百キロ，かつてゴールドラッシュに沸いたバララットのシャムロックホテル．ホテルの裏手にはイエロークリークという川がある．美しかったこの川も，ゴールドラッシュでめちゃくちゃにされ，その後ホテルは寂れた．持ち主マイケル・ドイルはアイルランド系であるが妻も子供達も大食いで，家計は火の車．薄汚いべちゃくちゃとおしゃべりをする中国人の廃鉱あさり共が川原に小屋を構えてからは，ニワトリや子豚，台所用品がなくなるのである．ドイル夫妻が彼らのキャンプに怒鳴りこむと，彼らは急に友好的になり，ホテルに出入りするようになった．そうして散らかっている煉瓦をさりげなく持ち去る．中国人がホテルを壊してまで煉瓦を運び出すようになると．ミッキーも怒り，猛犬を飼った．中国人は代表を派遣し，ホテルを現金50ポンドで買収するという．喜んだミッキーだったが，最後の瞬間に，ホテルの煉瓦が金のナゲットを豊富に含んでいたことに気付くのである．この作品は差別語を遠慮なく使い，場所の名にも民族を象徴する工夫がなされて非常におもしろい．オーストラリア人の本音の出たこういう作品がアンソロジーで敬遠される傾向にあるのは，やむを得ないとはいえ残念である．

Lesley Rowlands (1925～　) の 'A Really Splendid Evening' は日本人にも身近な問題を扱っている．オーストラリア人グリーンバーグはニューデリー空港でインド人ラオの世話になった．今晩そのラオが会いに来るという．グリーンバーグ夫妻はラオをレストランに案内する．そこでの豪印両国人の間の意見の食い違いや無理解が，双方の立場から公平に描かれる．例えばラオは酒類を飲まない事が誇りであるのに，夫妻はそんな彼をつまらない人間と思うだけ．ラオは政治や国際情勢の話をしたいのに，夫より妻が前面に出て，くだらぬ話題を持ち出す．ラオは夫人の香水が，夫妻はラオの髪油や体臭が気にさわる．結局双方は不愉快な気持ちで別れる．この作品は個人のレベルでの国際理解の問題点を双方に公平な観点から描いていて，'A Golden Shanty' と比べて隔世の感があるが，同時に異民族間の摩擦の根深さを感じさせる．

Thelma Forshaw (1923～　) の 'The Wowser' は，分類に迷う作品である．アイルランド系のハローラン一族の変人奇人ぶりを描いたことに異論はない．しかし同化の問題も

無視できない．ハローラン一族が集まって wake または orgy と称する酒盛りをする様は原住民のカラバリにも似ていた．皆物まね上手で，死んだ一族のまねをするたびに死者は蘇り，宴は賑やかになり，クラリーおじなどは神父のまねをして悪ふざけする．若い私やプロテスタントの父はびっくりして見るだけ．しかし今一族の殆どは死んで，母と私とディーおばとクラリーおじが残った．クラリーおじは若い頃とは一転して酒も飲まない謹厳な生活に入り．一族の真の性質を受け継ぐディーおばから見れば脱退者とも裏切り者ともみえる．同じく母はおばの目からみると妥協的な偽善者で，私は wowser すなわち楽しみに加わらぬ興ざめ者なのだ．この作品はハローラン一族の変人奇人ぶりは鮮やかに描かれている．しかし同化の問題，移民がオーストラリアに来て，民族の本質を押し通すか，変身して適応保身に走るかの問題は明らかに提起されているのに，筆者は口ごもりがちであり，そこがまた興味深い．

3—4 生存競争

D. E. Charlwood (1915～　) の 'The Pilgrimage Year' は語り手の祖母の思い出話である．私は幼い頃クリスマスを田舎の祖母の所で過ごした．一族20人位集まるが，なぜか大おばエリザベスとは姉妹なのに交際が無かった．祖母は土地でも草分け的存在で，94歳の今もテーブルの上座に着き，母や7人のおじ，おばに君臨していた．1855年両親や兄弟姉妹とオーストラリアに移民して来た時，船は難破したが，その後祖母だけは家族と別行動をとったということを私は知っていた．祖母は私に打ち明けて言った．"エリザベスを知っているね．私は彼女から許してもらえないんだよ．エリザベスは彼の許嫁だったのに，船の中で私は彼を取ってしまったのさ．彼は小さなボートから砂地へ私を運んだ．何一つ持たずに私達は皆と別れて，私達の人生を始めた．その時私は18だったよ．" 生活の厳しかった昔を物語る時，オーストラリアの文学は独特の迫力がある．祖母の I took him. という言葉には，愛よりも生存競争という観念が強く感じられる．

3—5 メートシップ

メートシップとフレンドシップとの違いを一言で言えば，前者には生存が掛かっていると言えよう．H. P. Heseltine (1931～　) はメートシップを survival technique だとしている．[2] ブッシュを生き抜くのに孤独では発狂やアルコール中毒の危険さえある．ちなみにオーストラリアの長編小説では登場人物が発狂したり，アル中になる例が比較的多い．メートシップをテーマにした短編はブッシュマンの登場するローソンの作品に多いのだが，この短編集には少ない．

Gavin Casey (1907～64) の 'The Day at Brown Lakes' は少年時代に自転車旅行に同行した友人に話し掛ける形式で書かれている．自分の自転車が壊れた時，友人が最後まで付き合ってくれたことが感謝をこめて回想されている．少年の作文を思わせるこの短編がオーストラリア短編小説でも優れた作品とされていることは受け入れ難く，今後の研究課題である．

Marjorie Barnard (1897～　) の 'The Persimmon-tree' は病気回復期にあたる繊細なヒロインが，向かい窓に住む健康な女に春の到来を感じて心臓が破れるほどの思いをするという超短編だが，メートシップの願望が隠されている．

Ray Mathew (1929～　) の 'A Real Lie' は，オールドミスの老女が二人同居生活をしていて頭が次第におかしくなり無理心中する話である．パトリック・ホワイトの The

Solid Mandala の双子の主人公の行動との共通点が気になる作品である.

人の心を開く，私はこうやって人の心を開きましたという主張がテーマとなっている作品が二つあり，メートシップに準じるものとしてここへ分類した.

Mena Abudullah (1930～　) と Ray Mathew (1929～　) の 'Because of the Russilla' には，オーストラリアに適応しようとしているインド人家族の生き方が，少女の目を通して描かれている．ピアノの音一つがもたらす感激や，パイピングケットルを聞いた驚き，紅茶の味や色への鋭敏な感覚が，少女の心を通して表現されている．素直な子供達の心が老婦人の心を開くさまが，心に染み込むようにえがかれている.

Alan Marshall (1902～84) の 'Trees Can Speak' に登場する少年は，決して口をきかないと言われる金鉱掘りの男の心を開き，最後にグッドバイという言葉を引き出す．作者は無口のジョーにブッシュの精神を体現するキャラクターの役を負わせ，ブッシュにおけるメートシップの神話の可能性を暗示しようとしている.

3—6 保身性

オーストラリア短編小説の手法は写実的であり，時に日本の私小説にも接近する．しかし意味ある人生をおくるため社会的地位の下降をも辞さないといった思想とはさすがに無縁で，むしろここにいう保身性のテーマがまま現れる.

Norman Lindsay (1879～1969) の 'The Outcasts' は子供の情景を戯画的に描いた作品である．二組の幼い兄弟が親に叱られた不満が引き金で，宝物，食糧，ろうそくなどを持って家出し，近くの廃鉱に住もうとするが，結局その日の内に帰宅する．この作品は次の二作と奇妙に似ている．何より奇妙なのはこれを書いたのが，本は発禁，絵は秘密公開というあのリンゼイだという点である.[3]

Brian James (1892～1972) の 'Jacob's Escape' は，前作の大人版である．ジェイコブが家出を決意するのもささいな妻の態度からで，家出の先は妻の妹の夫ハーマンの家．一人留守番をしていたハーマンとシェリー酒を飲み，歌を歌い，あげくは家に帰ってくる.

Elizabeth Harrower (1928～　) の 'The Cost of Things' は，メルボルンに住むフリーマンという妻子あるサラリーマンがシドニーへ単身赴任中に，クレアという女性と知り合うが結局家に戻るという話である．ドクトルジバゴが妻の手紙を受け取って感激のあまり失神するくだりをクレアが朗読してくれた時，フリーマンはそういうロシア的強烈さは自分たちからは程遠いといって嘆く．クレアも言う．人生で人間は渡り鳥のように疲れる．その時，古い衣服，家族の健康，休日，食べ物，友人などが大切になると．ここではオーストラリア人の保身性がテーマの中心に据えられている.

3—7 夢を抱く

ブッシュに生きる 'Drover's Wife' のヒロインや 'A Visit to Scrubby Gully' の鉱夫は，夢を抱かぬことでブッシュに耐えて適応している．しかしオーストラリア文学の登場人物がみな夢を抱かぬわけではない．以下の三作品が揃って夢を抱くことを取り上げ，しかも夢の愚かさ，はかなさをテーマとしている点には注目せざるを得ない.

James Hackston (1888～1967) の 'Our New Properties' では，取らぬ狸の皮算用をする父の姿がマンガ風に描かれる．父は，紙の上に何百エーカーの土地を持つ牧場と牧羊業者にふさわしい家を描く．母は子供たちの服のつぎを当てたり，父の靴下の繕いをしている.

ある晩新聞を読んで居て，北部の牧羊業者たちが食草の不足で破産していることを知り，父の夢は果樹園経営に切り替わった．ある日，父は店主のために棚を吊る仕事を申し込みに町へ出掛けたのに，とある不動産屋を見付けて乗り込み，果樹園の物件を照会する．売りにでている果樹園がちょうどあって現地視察までする父．すっかり信用した不動産屋は家まで押し掛けて来て現実を知り，呆れて帰って行く．母にしかられて父はあわてて棚吊りの仕事の申し込みに出掛ける．

Hal Porter (1911～84) の 'Francis Silver' に登場する母は死ぬまで恋人の面影を大切にしている．母が41歳で死んだ時，私は18歳だった．長男の私は母からフランシス・シルバーのことをよく聞かされた．母はメルボルンの郊外の中流家庭に育ち，数多い求婚者の中に田舎出身の父と都会出身のシルバーとが居た．結局父を選んだ母ではあったが，恋人シルバーから来た葉書を数冊のアルバムにして大切にしていた．母の話をきいた私の心の中で，シルバーは父よりもハンサムで，陽気で，才能に恵まれた理想の男性像として定着した．母は死ぬときアルバムをシルバーに届けるよう私に頼んだ．教えられた住所の額縁屋を訪ねると，背の低い太った男が出てきた，なまった発音で，筆跡は自分のものだが母を覚えていないと言う．

Dal Stivens (1911～　) の 'The Pepper-tree' に登場する父の夢は三つあった．コショーの木と自分の家とロールスロイスである．父がロールスロイスを欲したのは見栄からではない．若い頃技師になろうとして夜学に通い目を悪くした位だから，父は機械が好きだった．父によれば，ロールスロイスはこの世で最も完全な機械なのだ．故郷を捨ててニュータウン市に出てきた父は，故郷の大きな庭の大きなコショーの木に憧れていた．さて三つの夢を実現すべく，父はある日古エンジンを買ってきた，井戸を清掃する道具を試作し，雨の少ない土地を求めて西へ向かった．父からは火曜日に決まって手紙が来，母は地図の上に旗を立てさせた．最後の手紙は父の故郷からであった．次の木曜日には父は帰ってきた，エンジンもトラックも売り払って．エンジンが古すぎたと父はいった．私が故郷のコショーの木についてたずねると父はいった．"ちっぽけな木だった．庭もちっぽけだった．" その後父はコショーの木の話もロールスロイスの話もしなくなった．

4. 結　　論

Davis and Stewart 編 *The Best Australian Short Stories* のテーマを分類して分かることは，オーストラリア短編小説の手法が主として写実主義であることである．この短編集の52編の内で写実的でないものは次の5編にすぎない．すなわち，動物寓話の 'Destiny'，空想的な 'The Cast-iron Canvasser'，'The Vine-dweller'，芥川の「女体」をヒントにしたかもしれない 'Song of the Flea'，原住民の神話に取材した 'The Beautiful Pattern' である．こうなった事情の背後には，短編小説の伝統を築いた1880年創刊の週間新聞 *The Bulletin* が本国英国に対する国粋主義からオーストラリアらしさを強調した事が大きいと思われる．短編小説に取り上げられる情景は，オーストラリアらしさを強調するため，都市よりも奥地ブッシュが好んで取り上げられた．またそこでの極限情況は，事実に即して表現するだけで都会の住人あるいは英国人に興味あるものたり得た．オーストラリア短編小説の主たる関心が適応だという議論が成り立つ前提にはこういう事情がある．

さてこれまで見てきたテーマは適応の対象別に次の3種類に大別できる.

(1) 自然に対する適応→変人奇人の肖像1・耐える

(2) 社会に対する適応→変人奇人の肖像2・競争（異民族間の摩擦・生存競争）・共存（メートシップ）

(3) 自己に対する適応→保身・夢を抱く

4—1 自然に対する適応

≪変人奇人の肖像1≫ごくおおざっぱな言い方であるが,「風変わりな人物のスケッチ」はブッシュの孤独に耐えるブッシュマン，職業からいうと牧羊業者に雇われてブッシュを旅する家畜追いや羊刈り職人，または日照りや洪水などに悩まされつつセレクションという小農場を経営する農夫などに取材したものが原点である．これらブッシュという環境のものを≪変人奇人の肖像1≫とすれば，作品番号2，8，9，15，19，20，42などがこれに該当する．変人奇人のスケッチでは，ローソンの作品は例外である．その作品の漂わす誌情と，主人公が多くはブッシュに適応しているという点で．多くの作品はブッシュへの適応に失敗した人間の奇人ぶりに興味の中心を据えて書いている．

≪耐える≫に分類された作品は，ブッシュでの牧畜あるいは農業の困難さとそれに耐える人間に光が当てられている．耐えると分類された4作品ではブッシュに取材したもの3編，農場1編である．自然の課す困難と人間との戦いで，人間が何等かの変質を被ったのが≪変人奇人の肖像≫,人間が辛うじて正常を保っているのが≪耐える≫,とみることができる．

4—2 社会に対する適応

≪変人奇人の肖像2≫は社会的環境すなわち流刑制度，波止場，戦場，サラリーマン社会などへの適応過程で，人間が何等かの変質を被ったと見られるもので，作品番号6，13，17 24，26，36，51などが該当する．

≪異民族間の摩擦≫と≪生存競争≫は，社会に対する適応を競争という手段に訴えたもの．

≪メートシップ≫は社会に対する適応を共存という手段で解決しようとしたもの，と見なすことができる．

4—3 自分に対する適応

≪保身≫とは現実に適応するため自分の夢を放棄することであり,≪夢を抱く≫と表裏の関係にあるといえる．

以上をまとめるとオーストラリア短編小説の主たる関心は適応ということになる．オーストラリア人は明るくのんきに見えるが，その内心では物質的繁栄への憧れも含めて生存競争への関心が強いと言わねばならない．一覧表で示したように本短編集ではテーマと関係なく52編中49編は適応に関心がある．ちなみに *The Oxford Anthology of Australian Literature* の Contemporary Writing の項に収録された10編の短編小説の内6編はやはり適応に興味の中心がある．生存競争への関心からコミュニケーションの重要性と保身性が派生する．孤独が狂気さえも導きかねない奥地でのメートシップの重要性，異民族と上手に付き合うため人の心を開くことの重要性はすなわちコミュニケーションの重要性である．保身性をテーマにした作品などは，日本の私小説などからは非常に考えにくい．別の言い方をすればオーストラリア文学は極めて宗教性が薄く，アメリカ文学と比較すれば宗教文学が欠如しているとさえいえる．

BEST AUSTRALIAN SHORT STORIES テーマ一覧表

作者	作品番号		1 変人奇人	2 耐える	3 異民族間	4 生存競争	5 メート	6 保身	7 夢を抱く	8 その他	適応不適応	時代区分
Henry Lawson	The Drover's Wife	1		◎							○	UNTIL
	The Bush Undertaker	2	◎				○				○	
Edward Dyson	A Golden Shanty	3			◎						○	
	A Visit to Scrubby Gully	4		◎							○	
James Esmond	The Deeply Poetic Account of A Midsummer Night's Idyll	5								◎	○	
Price Warung	Lieutenant Darrell's Predicament	6	◎								×	
Barbara Baynton ♀	The Chosen Vessel	7		○		◎					×	
	Billy Skywonkie	8	◎			○					○	
Frank Penn-Smith	Piety's Monument	9	◎								×	
	Destiny	10					◎				○×	
Louis Becke	The Methodical Mr Burr of Majuru	11			◎						○	
A. B. Patterson	The Cast-iron Canvasser	12								◎	×	1918
Robert Brothers	Warf Labourers	13	◎								×	
Norman Lindsay	The Outcasts	14						◎			○	
Hugh McCrae	Adventure	15	◎				○				×	1920S
H. H. Richardson ♀	The Bath—An Aquarelle	16								◎	△	

W. Baylebridge	The Duel	17	◎								○	AND
Vance Palmer	Mathieson's Wife	18				○		○	◎		○	
K. S. Prichard ♀	The Cooboo	19	○		◎						○×	1930S
Les Robinson	The Vine-dweller	20	◎								○	
	Song of the Flea	21								◎	×	
E. O. Schlunke	The lrling	22				◎					×	
	The Enthusiastic Prisoner	23			◎						○×	1940S
Brian James	Cheque Day	24	◎								○	
	Jacob's Escape	25						◎			○	
James Hackston	Our New Properties	26	○						◎		×	
	Father Clears Out	27						◎			○	
F. D. Davison	The Road to Yesterday	28		◎					○		○	
Abdullah ♀ & Mathew	Because of the Rusilla	29					◎				○	TO
E. Anderson ♀	The Rector's Wife Tempts	30										
	The Bishop with a Brew of Nyppe					◎					○	
M. Barnard ♀	The Persimmon-tree	31					◎				○	
David Campbell	Come On, Billy	32								◎	△	
Gavin Casey	That Day at Brown Lakes	33					◎				○	
D. E. Charlwood	The Pilgrimage Year	34				◎					○	1960S
Peter Cowan	The Tractor	35								◎	○	
Thelma Forshaw ♀	The Wowser	36	◎		○			○			○	

E. Harrower ♀	The Cost of Things	37						◎			○	
Alwyn Lee	The Corvidae	38			◎						○	
Cecil Mann	The Pelican	39								◎	△	
Alan Marshall	Trees Can Speak	40					◎				○	1940S
Ray Mathew	A Real Lie	41					◎				×	
John Morrison	Goyai	42	◎						○		×	
Hal Porter	Francis Silver	43							◎		○	
D. Rowbotham	A Schoolie and a Ghost	44			◎						○	
L. Rowlands ♀	A Really Splendid Evening	45			◎						×	TO
Olaf Ruhen	The Beautiful Pattern	46								◎	△	
Peter Shrubb	A List of All People	47								◎	△	
Douglas Stewart	The Three Jolly Foxes	48				◎					○	
Dal Stivens	The Pepper-tree	49							◎		×	
Margaret Trist ♀	Uncle Patrick was a Scholar	50							◎		○	1960S
Judah Waten	Mother	51	○		◎				○		×	
Judith Wright ♀	The Ant-lion	52								◎	△	
	◎ 主テーマ		11	3	8	5	6	4	5	10	○32	
	○ 副テーマ		3	1	1	2	2	2	3		×17	
	◎ ＋ ○		14	4	9	7	8	6	8	10	△ 6	

◎ 主テーマ　○ 副テーマ　○ 適応　× 不適応　△ irrelevant

パトリック・ホワイトは1958年に書いた評論 'The Prodigal Son' の中で『人間の樹』執筆の動機を述べる所でオーストラリアの物質主義と知的貧困を Great Australian Emptiness と呼び，"私が充実させねばならない空虚は巨大であった．この本では普通の男女の物語りを通じて人生をあらゆる角度から描いてみたかった．普通といっても，その背後に普通でないもの，人生を耐えられるものにする神秘や詩情を発掘してみたかった．" といっているがこのパトリック・ホワイトの言葉も本短編集のこういった分析を背景とすればよくわかるのでありここにこの小論の意義の一つが見いだせると主張したいのである．

参 考 文 献

(1) Nettie Palmer, "Fourteen Years:...A Prviate Journal, February 9, 1927." in *The Oxford Anthology of Australian Literature*, ed. by Leonie Kramer and Adrian Mitchell (Oxford University Press, 1985), p. 304.

(2) Harry P. Heseltine, "Australian Image: The Literary Heritage." in *The Oxford Anthology of Australian Literature*, p. 304.

(3) Thomas Shapcott, "Australian Poetry Since 1920." in *The Literature of Australia*, ed. by Geoffrey Dutton (Penguin, 1976), p. 103.